

「北海道の離島における自然・歴史・文化に関する研究」実施報告

尾曲香織・圓谷昂史・表 溪太・亀丸由紀子・鈴木明世・鈴木あすみ

Key Words

奥尻島 (Okushiri Island)、動物相 (Fauna)、漂着物 (Marine debris)、民俗 (Folk customs)、建築史 (Architectural history)、アイヌ文化 (Ainu culture)

1 はじめに

本稿は、北海道博物館で実施している「北海道の自然・歴史・文化」総合研究プロジェクトの研究課題の一つであり、2019年度より5年間かけて実施した「北海道の離島における自然・歴史・文化に関する研究」について、その結果を報告するものである。

本研究課題では、複数の分野の学芸員・研究職員が各自の視点で同一地域の研究を実施した。その目的は、①先行研究の少ない生態学や海岸漂着物に関する研究の推進、②民俗学や建築史においては蓄積の少ない1993年の北海道南西沖地震以前から現在にかけての歴史の変遷に着目した研究の推進、③アイヌ民族の調査時点での居住の有無に依らないアイヌ文化研究における奥尻島の位置づけの検討といった基礎的作業のほか、それぞれの成果を有機的に組み合わせ、GIS (地理情報システム) を使用した分析を行うことであった。これらの背景及び実施に至った経緯などの詳細は、中間報告 (尾曲ほか2022) を参照されたい。この間、現地での調査日程に合わせ、アウトリーチ活動の一環として町民向け講座も実施した。このうち、2019年度から2021年度までの実施経過及び結果は報告済みであり (尾曲ほか 前掲)、本稿は2022年度から2023年度にかけての内容を中心に記述する。

2 調査の概要

(1) 調査内容と分担

本研究課題では、①島内及び周辺の各種生物の生息状況の把握、②化石貝類の発掘、③海岸の現生貝類及び漂着物の把握、④現在聞き取れる戦中・戦後にかけての民俗事象の把握、⑤集落や住居の形態とその歴史の変遷、

⑥奥尻島とアイヌ文化の関わりを明らかにするとともに、⑦①～⑥の調査成果の効果的な活用手法を検討するため、次のとおり分担して調査を行った。なお、調査期間中必要に応じて他分野の学芸員・研究職員が補助を行った。

- ①表 (哺乳類)、鈴木あすみ (博物館資料学)
- ②③圓谷 (現生・化石貝類、海岸漂着物)
- ④尾曲 (民俗)
- ⑤鈴木明世 (建築史)
- ⑥亀丸 (アイヌ文化)
- ⑦鈴木あすみ (博物館資料学)

(2) これまでの調査実施状況

2021年以降も年に2回、およそ3人ずつに分かれ現地調査を実施する計画で進めた。現地調査の時期は、積雪のない時期 (主に夏から秋にかけて) と、冬期間 (主に1～2月) との2回を予定していたが、前者のみとなった。またこの間、島外にいる奥尻島出身者と知遇を得ることもでき、そちらへの聞き取り調査も行った。島外での聞き取りについては、別途調査地を記す。各年度の調査期間、メンバーは下記の通り。

なお、最終年度の2023年度は、奥尻町教育委員会との共催で、研究成果報告のパネル展を開催した。

①2022年度

【1回目】

期間：2022年10月25日 場所：栗山町

メンバー：尾曲

【2回目】

期間：2022年11月4～8日

メンバー：圓谷、尾曲、鈴木明世

【3回目】

期間：2023年3月13日 場所：平取町

尾曲香織：北海道博物館 研究部 生活文化研究グループ
圓谷昂史：北海道博物館 研究部 自然研究グループ
表 溪太：北海道博物館 研究部 自然研究グループ
亀丸由紀子：北海道博物館 アイヌ民族文化研究センター アイヌ文化研究グループ
鈴木明世：北海道博物館 研究部 博物館研究グループ
鈴木あすみ：北海道博物館 研究部 博物館研究グループ

メンバー：亀丸、尾曲

②2023年度

【1回目】

期間：2023年6月10日 場所：栗山町

メンバー：尾曲

【2回目】

期間：2023年9月29日～10月1日

メンバー：表、亀丸

成果報告展準備及び補足調査

【3回目】

期間：2023年10月20～23日

メンバー：尾曲、表

成果報告展撤収及び補足調査

(3) アウトリーチ活動

現地での調査期間中、奥尻町教育委員会と協力し、メンバーが町民向けの講座の講師を務めてきた。2022年度は実施せず、2023年度に講座を1回行った。また、成果報告のパネル展を奥尻町教育委員会との共催で実施した。

①成果報告パネル展

タイトル：北海道博物館総合研究プロジェクト 北海道の離島における自然・歴史・文化に関する研究成果報告展

日程：2023年10月1～22日

会場：奥尻町海洋研修センター 1階 多目的ホール

②チャレンジスクール（講座）

日程：2023年10月21日

講師：表溪太、尾曲香織

タイトル：「羊毛で動物を作ってみよう」

3 各分野の調査状況

(1) 脊椎動物相

奥尻島は最終氷期にも北海道本島と陸続きにならなかったとされている（大嶋 1990）。そのため、陸生哺乳類の多様性が低く、大部分の種が人によって持ち込まれたとされている。しかしながら、それらについての継続的な調査は行われてこなかった。そこで今回、奥尻島の哺乳類の生息状況を把握するために現地調査を行った。

奥尻島の小型哺乳類は、齧歯目（ネズミ類）および翼手目（コウモリ類）それぞれ数種の生息が確認されている（太田 1956、1968；福井ほか 2005、環境省自然環境局生物多様性センター 2010）。齧歯目ではアカネズミ *Apodemus speciosus*、ドブネズミ *Rattus norvegicus*、ハツカネズミ *Mus musculus* の3種が生息する。2019年度は森林部と民家周辺を調査地とし、許可を得て小型哺乳類の捕獲調査を実施し、森林部に2個体のアカネズミを採集した。これらのネズミ類の生息環境を調べるために

捕獲調査地および稲穂地区を対象に2021年度に行った植生調査では、樹木の落葉や実を採集し樹種を同定した。調査では、ブナやアカイタヤなどからなる冷温帯植生がみられたほか、奥尻島が国内分布の北限であるケンポナシなども確認できた。以上のように、ブナやカエデ類などネズミ類の餌資源となる広葉樹が分布していることがわかった。最近の奥尻島の詳細な植生調査については並川ら（2021）などの報告があるので、こちらを参照されたい。

奥尻島の中型哺乳類としては、タヌキ *Nyctereutes procyonoides*、ミンク *Neovison vison*、ハクビシン *Paguma larvata* が記録されている（北海道 2010、奥尻町史編さん委員会 1997）。中型哺乳類の調査は、積雪期（2019・2020年2月）および非積雪期（2023年9～10月）に奥尻・球浦・青苗地区等の山林を踏査し痕跡の探索を行い、また路上で車両による走査を行った（2021年11月、2023年9～10月）。その結果、生息するとされている中型哺乳類3種のものと思われる痕跡を確認することができた。タヌキは島の各地で、高頻度で目視し（写真1）、ため糞も多数確認されたことから、かなりの高密度で生息していると思われる。富里地区ではイネの種子（コメ）を多く含むタヌキのため糞を発見した（2023年9月；写真2、3）。タヌキは雑食性であり、昆虫や小動物、果実等を採食するが、奥尻島の稲作地域ではコメも利用していることが確認できた。ミンクと思われるイタチ科動物の足跡は2019年2月に奥尻地区の民家近くで、ハクビシンのものと思われる足跡は2020年2月に球浦地区の林道上で確認した（写真4）。ハクビシンは東南アジアから移入されたとされており、北海道内にはほとんど分布していないが、奥尻島では過去数件の記録があり（北海道 2010）、今回の調査で現在も生息していることが確認された。

鳥類は遭遇した場合に観察記録を随時実施している。



写真1 タヌキ



写真2 コメ入りのタヌキのため糞



写真5 ハクガン (左)、オオハクチョウ (右)



写真3 コメ入りのタヌキのため糞 (拡大)



写真6 マガン



写真7 シマヘビ黒化型



写真4 ハクビシンの足跡



写真8
ニホンカナヘビ幼体

その結果、富里地区の水田において、2021年11月にハクガン*Anser caerulescens*およびオオハクチョウ*Cygnus cygnus*を(写真5)、2023年9月末にはマガン*Anser albifrons*を確認した(写真6)。これらの水鳥は北海道本島では春と秋の渡りの時期に見られるが、過去に奥尻島では記録されていなかった(三浦 1988)。奥尻島は稲作を行っている離島としては日本最北であり、まれではあるが渡り中の水鳥の休息地となっているのかもしれない。

爬虫類としては、2021年10月にシマヘビ*Elaphe quadrivirgata*の黒化型(写真7)、2023年10月にニホンカナヘビ*Takydromus tachydromoides*の幼体(写真8)を発見した。(表溪太・鈴木あすみ)

(2) 現生・化石貝類および海岸漂着物

現生貝類(潮間帯及び打ち上げ)は、稲穂岬、東風泊、球浦、松江、青苗、青苗岬、米岡、藻内の8海岸で調査を行った(図1)。本島の貝類相は、奥尻町史編さん委員会(1997)で73種類、圓谷・鈴木(2020)で75種が報告されている。2022年度の調査では、先行研究では報告されていない、腹足綱5種、二枚貝綱2種を新たに確認した(表1)。この内、アシヤガイ*Granata lyrate*、ネコガイ*Eunaticina papilla*は、国内の最北記録と考えられる。

化石貝類(新第三紀中期中新世:約1500万年前)は、2021年度までに宮津地区で採集した試料をクリーニング(石の中から化石を取り出す作業)し、種を同定した(図1)。その結果、ほぼ完全な*Vicarya yokoyama*を確認した(図2)。この他に*Anadara (Hataiarca) kakehataensis*、*Cultellus izumoensis*など、Uozumi and Fujie(1966)で報告された種を確認した。

海岸漂着物は、現生貝類と同地点で調査を行った。その結果、南硫黄島に位置する海底火山「福德岡ノ場」の噴火(2021年8月13日)に由来する漂着軽石を地点6、8

を除く6地点で確認した(図1、図3)。本軽石は、海洋に流出したあと海流に乗って拡散し、南西諸島沿岸(宇佐美・新城 2022; Yoshida et al. 2022)、福岡県や富山県沿岸(椎原ほか 2022; 増渕ほか 2023)でも漂着が報告されていることから、対馬暖流によって運搬され、本島に漂着したと考えられる。

以上の調査により、本島の現生貝類相の基礎データの蓄積と、化石貝類の資料を採集することができた。なお、「福德岡ノ場」の噴火由来の軽石は、圓谷ほか(2024)にて詳細を報告し、海岸漂着物の内、人工物の構成は、別稿にて報告することとしたい。

(圓谷昂史)

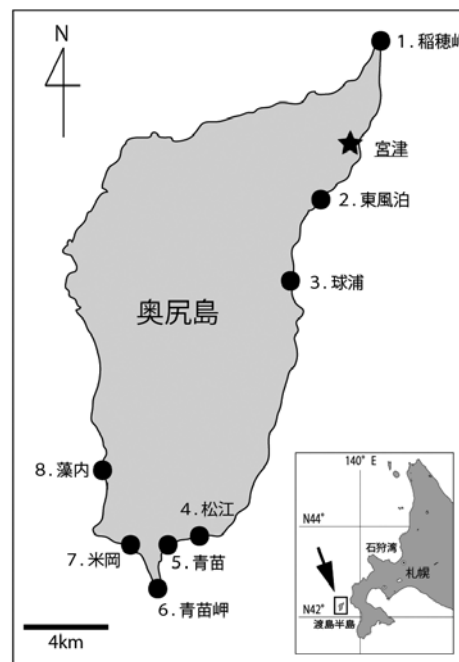


図1 調査地点 (●: 現生貝類と海岸漂着物、★: 化石貝類)

(3) 民俗

本研究課題では、主として戦後の人生儀礼、年中行事といった基本的事項の聞き取り及び記録を目的とし、

表1 2022年調査で新たに確認した現生貝類

	生息底質	地理分布	調査地点							
			1	2	3	4	5	6	7	8
(腹足綱)										
<i>Cellana toreuma</i> (Reeve, 1855)	クビレクロツケ	R CW			○					
<i>Granata lyrate</i> (Pilsbry, 1890)	アシヤガイ	R W	○							
<i>Macroschisma sinensis</i> (A.Adams, 1851)	スカシガイ	R W		○	○					
<i>Eunaticina papilla</i> (Gmelin, 1791)	ネコガイ	FS W						○		
<i>Nassarius (Niotha) livescens</i> (Philippi, 1849)	ムシロガイ	R CW		○						
(二枚貝綱)										
<i>Cardita leana</i> Dunker, 1860	トマヤガイ	SG CW	○	○						
<i>Lyonsia ventricose</i> Gould, 1861	サザナミガイ	S CW						○		

調査地点 地点1:稲穂岬, 地点2:東風泊, 地点3:球浦, 地点4:松江, 地点5:青苗, 地点6:青苗岬, 地点7:米岡, 地点8:藻内

生息底質 R:岩礁, SG:砂礫, S:砂, FS:細砂, SM:砂泥, M:泥

地理分布 C:寒流系種, CW:広温種, W:暖流系種

図2 奥尻島から産出した*Vicarya yokoyamai*

図3 2021年「福徳岡ノ場」噴火由来の漂着軽石

2020年度以降宮津、稲穂、青苗の各集落及び栗山町で計12名から聞き取りを実施した。2022年度から2023年度にかけてはそのうち6名から聞き取りを行った。年齢の内訳はそれぞれの調査時点で、70代が男女各1名、80代が女性4名である。

話者に女性が多かったのは、年中行事等の基本的事項の確認に加え、2021年度までの調査において、女性が一度進学等を機に島外に出て、戻ってから結婚するという事例を収集し、それがどれほど一般的であるか、またどのくらいまで遡れるか確認するためであった。女性が結婚前に故郷を離れ、いわゆる「世間を知って」故郷に戻るといふ例はこれまででも多数報告されてきたことではあるが（宮本 1984など）、奥尻島での実態についても

本研究課題で明らかにしたいと考えた。

結果としては、2022年度から2023年度にかけて聞き取り調査をおこなった女性5名中3名（80代）が結婚前に進学あるいは手に職をつけることを目的として島外で一定期間を過ごし、うち2名は奥尻島に戻り、残る1名は教職につき、現在まで栗山町在住である。この3名及び島内出身の女性1名（70代）は、奥尻島出身者である。70代女性は中学卒業後島外の理容院に就職予定だったものの、島内に就職先が見つかったことから島外に出なかった。

5名中1名の女性（80代）は青森県出身者であり、結婚を機に奥尻島に移住した女性である。島内出身者ではないものの、結婚後もリング農家である実家に、収穫期などは手伝いのために定期的に帰省したり、子供が独立するころには冬場に関東地方で介護の仕事に従事するなど、奥尻島と他地域とを行き来していたことが明らかになった。

これらに加え、人生儀礼や年中行事、生業等に関するデータも得られており、別稿にて詳細を報告したい。

（尾曲香織）

(4) 建築史

研究課題において建築史の立場からは、奥尻島内での集落立地傾向や、住居などの典型的な間取り、そしてそれらの現代に至るまでの歴史の変遷過程の中に、「奥尻島らしさ」を見出すことを一つの目的とした。2021年度までの調査の中で、聞き取り調査をもとに勘太浜での集落立地や住居の変遷について明らかにした（尾曲ほか 前掲）。その後、2022年度の調査において、奥尻島内を悉皆的にまわり、集落調査を行った（調査地：海栗前、稲穂、勘太浜、宮津、東風泊、球浦、奥尻、谷地、赤石、恩顧歌、松江、初松前、青苗、米岡、富里、神威脇）。その中で、それぞれの集落について、集落立地の地形等の環境条件や住居等の配置、それぞれの敷地内の活用状況などの集落構造について記録・分析した。以上の調査を総合して、「成果報告パネル展」において、特に奥尻島東海岸側の集落を中心にした成果を公開した。

東海岸側の各地区の集落構造の差は、海から山による斜面地までの奥行きや、1993年の北海道南西沖地震を経てつくられた防潮堤と集落をつなぐ道路までの距離によって生じていた。特に、防潮堤付近での漁業用の手製の干し場や倉庫などのつくり方や、防潮堤上を物置などに利用したり波の様子を観察したりするための、防潮堤に登る階段の設置の有無や方法など、漁業という生業を行うための「堤防との付き合い方」の差は、各地区の個性となっていた。また、平地が広い地区などは、住居近くの敷地内で耕作を行っており、海風を除けるた

めの柵を建てるなど、沿岸部という立地ならではの設えを確認した。以上により、現代につくられた防潮堤も新しい「地形」とみなして考えると、沿岸部の環境条件や漁業という生業に合わせて、斜面から防潮堤にかけての地形の凹凸を使いこなすことで集落がかたちづくられてきた様子が見られた(図4)。

本研究課題の中では、新型コロナウイルス感染症の影響で、現地調査の実施が困難だったこともあり、間取りの実測等は1軒しか行えなかった。また、住居や道路から防潮堤にかけてつくられている漁業用の工作物の詳細について調査することはできなかった。これらは今後の課題としたい。(鈴木明世)

(5) アイヌ文化

2019～2021年度までに実施した調査では、奥尻島周辺地域を対象とした近代以降のアイヌ文化に関する議論が少ないことを指摘し、2022～2023年度は、この課題及び問題意識を念頭においた調査を行った。

これまでの調査によって、北海道沙流郡平取町二風谷で1992年に発行された「二風谷アイヌ語教室」の広報紙から、アイヌ文化研究者・工芸家で知られる萱野茂氏(1926-2006)の妻であり、同じく工芸家などとして知られる萱野れい子氏(1931-)が奥尻島出身者であることが判明していた(尾曲ほか 前掲)。今回の調査では、この情報を元に、奥尻島及び萱野れい子氏に関する情報得ることを目的に、れい子氏へ連絡を取ったところ、2023年3月に聞き取り調査を実施することができた。聞き取り調査では、出生地である奥尻島に関する記憶や思い出から、現在の活動に至るまで、れい子氏のこれまでの人生に関するさまざまな話を聞くことができた。今回は、聞き取り調査の中から、奥尻島に関する部分のみを端的に記す。

○萱野れい子氏への聞き取り調査概要

日時：2023年3月13日(月) 13:00～15:30

場所：萱野れい子氏自宅(沙流郡平取町二風谷)

調査者：亀丸由紀子・尾曲香織

- ・萱野れい子氏は、両親(父：二谷善之助、母：二谷はな)が、測量の仕事で奥尻島に住んでいた1931(昭和6)年の8月27日に、奥尻島で誕生。
- ・“れい子”という名前も奥尻で名付けられ、出生届も奥尻で提出された。
- ・出生時には、当時の助役に当たる人物の妻がお世話をしてくれた、とのこと。
→れい子氏が生まれた当時は、奥尻島に助役の役職が設けられていなかったため、助役に近い役職は、奥尻村長の若松清(1930年9月26日～1932年3月18日)

か、収入役の原養吉(在任期間：1913年7月～1931年8月28日)の2名が該当する。この二人のうち、いずれかの妻が、れい子氏の誕生を手助けした可能性が高い(奥尻町町史編さん委員会 1969：175-176、奥尻町町史編さん委員会 2003：211-213)。

- ・その後は、両親の仕事が終わると同時に両親の故郷である沙流郡平取町に戻り、以降、92歳(2024年1月現在)になった現在まで平取町で暮らしている。

今回の聞き取り調査の結果は、これまで言及の少なかった奥尻島における近代以降のアイヌの歴史について、具体的な人物のバックグラウンドからの情報を補足することができたほか、今後、現代工芸家の活動史やその半生を記録していくうえでも大変貴重な情報となった。今後、改めて調査内容の全体(奥尻島関係以外)を報告する機会を設けるとともに、奥尻町に関連する公文書などを対象とした調査を行い、類似例を見つけ出すことを今後の課題としたい。

また、本稿2-(3)にある「成果報告パネル展」では、萱野れい子氏の事例を中心に取り上げ、島民に奥尻島にゆかりのあるアイヌ工芸家について、紹介することができた(写真9)。(亀丸由紀子)

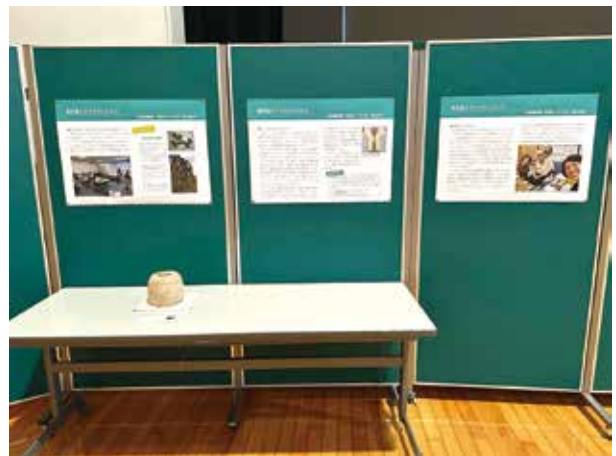


写真9 パネル展の様子

3 おわりに

2019年から5年間の予定で開始した本研究課題であったが、期間中新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、およそ2年現地調査が実施できない状況となった。これに加え、天候不良等で奥尻島に渡れない回もあるなど、十分な調査ができたとはいいがたいものの、各自が可能な限り事例の収集に努めた。

結果として、哺乳類、爬虫類及び化石貝類については過去に確認された複数の種を確認し、鳥類及び現生貝類

については、これまで記録されていなかった種についても複数確認できた。漂着物については、本研究期間中に起こった、「福徳岡ノ場」の噴火に由来する漂着軽石が奥尻島まで到達していることを確認し、この噴火の影響が広がった範囲に関する基礎情報を公開することができた。民俗においては、奥尻島出身の女性が進学や技術の習得を目的として島外に出て、結婚前に戻ってくるという流れが、およそ70年前にはあったことが確認できた。建築史については、1993年以降に作られた防潮堤の活用方法の差が、集落の景観の個性となっていることを発見した。アイヌ文化については、近代以降ほとんど報告されてこなかった奥尻島とアイヌとの関わりについて、個人への聞き取り調査によって具体的な事例を収集することができた。これらの調査成果の取りまとめにあたっては、それぞれの調査履歴等についてGISを用いてマッピングし、中間報告（尾曲ほか 前掲）及び現地でのパネル展にて活用した。詳細な分析やデータの活用については、今後の課題としたい。

本研究課題は2023年度で終了となるが、それぞれが引き続き調査を行い、また本研究課題による調査で得られた結果は、各種学会、北海道博物館研究紀要やその他学会誌等で報告する予定である。

謝辞

本研究課題の実施にあたっては、学芸員の稲垣森太氏をはじめ奥尻町教育委員会事務局の皆様にご多大なるご尽力をいただきました。また感染症が落ち着いていたとはいえ、不安の残る時期に直面での聞き取り調査にご協力くださいました皆様の協力なくして本研究課題を進めることはできませんでした。記して厚く御礼申し上げます。

参考文献

宇佐美 賢・新城竜一 2022. 福徳岡ノ場2021年8月噴火による沖縄県における漂着軽石の記録. 沖縄県立博物館・美術

- 館 博物館紀要 15: 1-16.
- 圓谷昂史・鈴木明彦 2020. 北海道奥尻島の打ち上げ貝類. 漂着物学会誌 18: 19-26.
- 大嶋和雄 1990. 第四期後期の海峡形成史. 第四期研究 29: 193-208.
- 太田嘉四夫 1968. 北海道産ネズミ類の生態学的分布の研究. 北海道大学農学部演習林研究報告 26: 223-295.
- 太田嘉四夫 1956. 北海道の離島の鼠類. 北海道大学農学部邦文紀要 2(4): 123-136.
- 奥尻町町史編さん委員会 1969. 奥尻町史. 北海道奥尻郡奥尻町. 奥尻町町史編さん委員会 1997. 新奥尻町史 [上巻]. 奥尻町役場.
- 奥尻町町史編さん委員会 2003. 新奥尻町史 [下巻]. 奥尻町役場.
- 尾曲香織・圓谷昂史・表 溪太・亀丸由紀子・鈴木明世・鈴木あすみ 2022. 「北海道の離島における自然・歴史・文化に関する研究」中間報告. 北海道博物館研究紀要 7: 83-90.
- 環境省自然環境局生物多様性センター 2010. 自然環境保全基礎調査 動物分布調査 日本の動物分布図集. pp.53-88.
- 椎原美紀・市原季彦・平峰玲緒奈・石村大輔 2022. 福岡市近郊における福徳岡ノ場2021噴火由来軽石の漂着状況. どんぶらこ 73: 11.
- 並川寛司・北村系子・松井哲哉・石川幸男 2021. 北海道南西部奥尻島と周辺地域のブナ林の種組成に関する比較研究. 植生学会誌 38: 175-190.
- 北海道 2010. 北海道ブルーリスト2010北海道外来種データベース. <http://bluelist.pref.hokkaido.lg.jp>
- 増渕佳子 2023. 富山湾における福徳岡ノ場2021年噴火の軽石の漂着状況. 富山市科学博物館研究報告 47: 91-93.
- 三浦二郎 1988. 道立自然公園総合調査（檜山道立自然公園）報告書 第2章鳥類. 道立自然公園総合調査（檜山道立自然公園）報告書. pp.176-202.
- 宮本常一 1984. 忘れられた日本人. 岩波書店.
- Uozumi, S. and Fujie, T., 1966, Neogene molluscan faunas in Hokkaido. Part II Description of the Okushiri fauna associated with *Vicarya*, from the Okushiri Island, Southwest Hokkaido. Jour. Fac. Sci. Hokkaido.
- Yoshida, K., Tamura, Y., Sato, T., Hanyu, T., Usui, Y., Chang, Q., and Ono, S. 2022. Variety of the drift pumice clasts from the 2021 Fukutoku-Oka-no-Ba eruption, Japan. Island Arc, 31(1), e12441. <https://doi.org/10.1111/iar.12441>

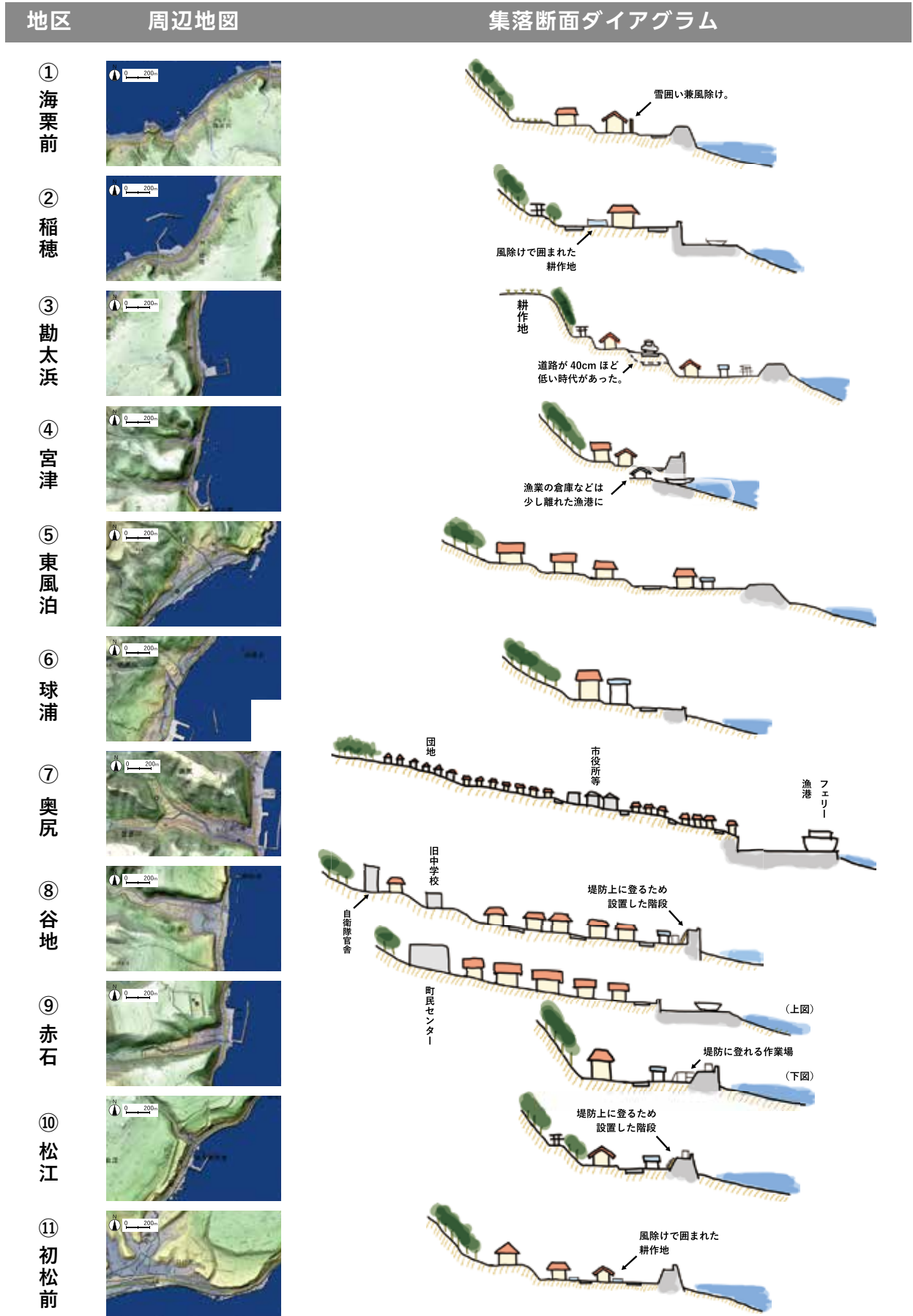


図4 奥尻島東海岸側の集落構造の比較
 ※成果展の展示パネルを改訂したもの。各地区の地図は、国土地理院の基盤地図に、カシミール3Dを用いて地形を強調している。

実地見聞

道路側の古い住居を倉庫に用い、その裏に新しい家を建てる傾向がある。雪や強風から建物を守るための囲いが道路側に設置されている。

平坦な地形になっており、2つの道路の間に住居が建ち、空いた土地で作物を育てている。耕作地は風除けで覆われている。

背後の斜面の際と道を挟んで海側の低い地形に住居が並ぶ。さらに海側に漁業の作業場や倉庫などを建てている。

他の地区と比べて狭い奥行き of 堤防と斜面地の間に、住居が建ち並ぶ。集落の南側に漁港があり、漁業用の倉庫などは、そこにまとまって建てられている。

海で削られて段々になった広い地形に広がるように、住居が建ち並んでいる。海側の家々は、勘太浜と同じような土地利用の変化があったと考えられる。

斜面地に寄って住居が建てられ、道路側には納屋のような建物や新しい住居が建てられる様子が見られる。

川によるなだらかな地形に、住居や町の中心施設が並び、上流側には、団地などの集合住宅が建ち並んでいる。

川によるなだらかな地形に、海側から住居が建ち並び、上流側に官舎や旧中学校などがある。堤防に登り、海の様子を見るための階段が設置されている。

川によるなだらかな地形に、海側から住居が建ち並び（上図）。斜面地と海が近い場所では手製の倉庫や干し場が堤防と一体となってつくられている（下図）。

堤防に登りやすいように斜面に合わせた階段を設置し、道路と堤防の間の倉庫だけでなく、堤防上も干し場や物置に利用している。

平坦な地形上に点々と家々が建ちならび、空いた土地で作物を育てている。耕作地は、風除けで囲っている。

各地区風景写真



① 海栗前



② 稲穂



③ 勘太浜



④ 宮津



⑤ 東風泊



⑥ 球浦



⑦ 奥尻



⑧ 谷地



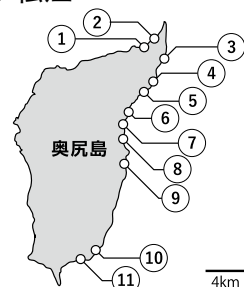
⑨ 赤石



⑩ 松江



⑪ 初松前



Remote Islands of Hokkaido Nature, History, and Culture Research Project Performance Report

OMAGARI Kaori, EN'YA Takafumi, OMOTE Keita, KAMEMARU Yukiko, SUZUKI Akiyo and SUZUKI Asumi

This is the final report of the Remote Islands of Hokkaido Nature, History, and Culture Research Project, which was conducted under a five-year plan from fiscal 2019 as one of the research topics of the Nature, History, and Culture of Hokkaido comprehensive research project.

In this project, team members investigated the following topics: vertebrates, extant and fossilized mollusks and beach driftage materials, folklore, architectural history, and Ainu culture. During the research period, we confirmed previously unrecorded avian species and extant mollusks. Additionally, we confirmed driftage of pumice originating from the 2021 eruption of the Fukutoku-Okanoba submarine volcano located near Iwo

Jima, and separately published these results. In the field of ethnology, we found that women currently aged around 80 left the island before marriage to attend school or gain skills before returning to the island, providing new insight into the life cycles of Okushiri Island residents. In the field of architectural history, we discovered that the manner of use of land around tide embankments by settlement residents affected the townscapes of these settlements. Furthermore, we confirmed that Ainu women were indeed born on Okushiri Island.

In addition to this report, we also presented results of this project via panel exhibitions on Okushiri Island, sharing our findings with the residents who participated in our investigations.

OMAGARI Kaori : Folk Life and Industrial History Group, Research Division, Hokkaido Museum

EN'YA Takafumi : Natural History Group, Research Division, Hokkaido Museum

OMOTE Keita : Natural History Group, Research Division, Hokkaido Museum

KAMEMARU Yukiko : Ainu Culture Group, Ainu Culture Research Center, Hokkaido Museum

SUZUKI Akiyo : Museum Studies Group, Research Division, Hokkaido Museum

SUZUKI Asumi : Museum Studies Group, Research Division, Hokkaido Museum
